



会の告知版

1月18日(土) 東久留米稲門会新年会

会場 成美教育文化会館 3階大研修室 18:00~

会費 5,000円 (同伴者2,000円)

2月 2日(日) 東久留米雑学塾(第8回)開催

15:00~16:30 於 中央公民館 第1・2学習室

演題: 山と酒を愛した牧水と山頭火

日本で一番歌碑、句碑の多い若山牧水と種田山頭火についてその人気の秘密や詩歌の説明、全国にわたる二人の足跡などを語ります。

講師: 竹村鏡郎氏

当会会員・23年商・TAMA市民塾講師、都生涯学習スポーツ部登録講師、NHK講師などで多方面で活躍されている。

2日(日) 役員会

3月 1日(土) 会報「社の西北」9号発行

特集「早稲田大学久留米錬成道場」掲載

3月30日(日) 東久留米稲門会第9回定期総会

於 成美教育文化会館 1階ギャラリー

14:00~15:30

講演 「反骨の言論人 浮田和民—早稲田大学草創期の巨人—」

講師 柴田卓弘(当会顧問、早大名誉教授)

15:30~16:10 総会

16:20~ 懇親会

[大学・校友会関係]

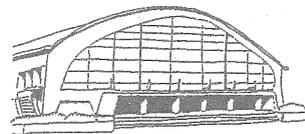
1月19日(日) 三多摩稲門連合会会長会

17:30~

於 三鷹「藤源」

3月 7日(金) 早大校友会代議員会

於 早稲田大学



記念会堂

[部会スケジュール]

太極拳部会

1月11日(土) 新春初稽古・新年会

10:00~ 成美教育文化会館

*以後毎週土曜日 10:00~11:30 成美教育文化会館。

3月29日又は4月4日、野外稽古(花見会を併行)

俳句部会

(年間句会開催スケジュール)

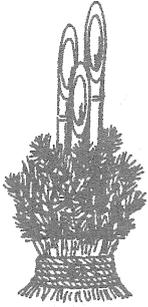
2月16日(日)、3月23日(日)、4月20日(日)、

5月18日(日)、7月23日(海の記念日)、9月21日(日)

11月16日(日)、12月21日(日)

いずれも 13:30~17:00 於 中央公民館(原則、但し
4月20日は吟行)

書道部会	毎月第2日曜日	13:30~16:30	中央公民館(原則)
囲碁部会	毎月第4日曜日	13:00~16:30	成美教育文化会館
女性サークル部会	2月 8日(土)		榎本会員宅
麻雀部会	2月16日(日)PM予定	詳細後報	
グルメ部会	4月 1日(火)	詳細次号掲載	



年頭にあたって

会長 高橋 勳

会員の皆様、明けましておめでとうございます。新年をご家族の皆様と共に
ご健勝にお迎えの事とお慶び申し上げます。

最近の大学の話題としましては、昨年11月5日、新総長に白井克彦理工
学部教授が就任し、大学の改革に大きな実績をあげました奥島孝康前総長は任期を全うして退
任されました。改革に取り組むなかで、奥島前総長は一貫して強い早大スポーツの復活を提唱
し、全種目制覇を声高に宣言していました。その成果としてか、今年の野球部の六大学での春
秋連覇は52年ぶり2度目の快挙を達成しました。またラグビーは昨年12月1日に明大を完
封にて勝利し7戦全勝で2年連続15回目の対抗戦制覇を果たしました。早大の2連覇は20年
ぶりです。昨年は関東学院大に惜敗して全国大学選手権大会の優勝を逃しましたが、今年はこの
東稲ニュースが皆様のお手元に届く頃には、早大!全国大学選手権大会優勝の記事が新聞紙
面を飾っていることを確信しています。

新年にあたり東久留米稲門会の活動の状況を展望してみますと、一昨年新規の事業としてス
タートしました「ホームページ」、「東稲ニュース」、「東久留米雑学塾」などはそれぞれに
素晴らしい成果をあげています。

会の情報を内外に発信するホームページは開設以来1年余で3700余のアクセスを得てい
ます。この数字は十分にその役割を果たしているものと思います。同時に当会の会員の皆様
に対してニュースを提供していますのが「東稲ニュース」です。隔月発行で、本新年号(9号)
は特別10頁建てとしました。

また東久留米稲門会の機関紙として年一回発行の「社の西北」は東久留米市在住の早稲田大
学OB約1000名の校友と大学や三多摩全ての稲門会に送付しています。「社の西北」はい
ずれも他所の会報と比べても見劣りしない内容であると自負しています。

以上の三つは当稲門会の情報を発信していく重要な媒体となっているのです。

昨年度、新しい行事として11月に16ミリ映画鑑賞会を開催いたしました。16ミリ映写
技師資格は数名の会員が講習とテストを受けて取得しました。第1回の上映は高倉健主演の
「鉄道員(ぼっばや)」でした。慣れない会員の技師による初めての映写でしたので不安を感
じていましたが、大きな失敗もなく見事な映写会となりました。一般市民の方たちにも大変好
評でした。この映写会は年に何回か定期的に開催していくように計画しています。

東久留米雑学塾も隔月開講で次回で第8回となります。毎回好評で、当会会員の他多数の一

般市民の参加もあります。これからは雑学塾と映写会相携えて東久留米市に対する文化的な面での貢献ができればと期しています。

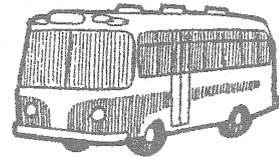
部会の活性化、部員の増強は当会が発展していく礎となるものです。現在各部会はそれぞれの特色を生かして活動を展開しています。当会設立の当初より活動している女性サークルは昨年11月に小江戸川越散策会を開催、囲碁、俳句、書道、ゴルフなどの各部会は会員も増えて確実な歩みを続けています。新設の太極拳部会では一般参加の部員も増えて大変盛況です。郷土研究会では10月に市内七福神巡りを実現させ成功を取めました。

とりわけ印象深かったのは、グルメ部会と散策山歩き部会の共催で行った10月の上州路・妙義山麓日帰りバスツアーでした。参加者は39名の多くを数え、好天気にもめぐまれ大変に好評でした。本年も出来れば同様のバスツアーを実現したいものです。

最後になりますが、本年度は新しい部会として「近郊・史蹟ウォークの会」の立ちあげを計画しています。梅の羽根木公園、羽村の史蹟と観桜、藤の亀戸天満宮、蹶躅の塩船観音寺、上野・浅草の寺院、赤穂浪士ひきあげの道等々バラエティーに富んだコース、数キロメートルを歩くものです。健康保持の意味合いも含めて隔月奇数月第一日曜日に実施したいと思います。

本年、皆様にとり健康で実りある年となられんことを衷心よりお祈りいたします。

会の行事



16ミリ映画自主映写会（第1回）開催

11月9日（土）中央図書館視聴覚ホールにて、16ミリ映写技師資格を取得した佐々木、高橋（勤）、帆角、松崎（博）、森田各氏により当会自主映写会が開催された。上演は「鉄道員ーぼっぼや」と「ライダーカップ1977」（ゴルフ米英対抗戦）。多数の一般市民を含む40数名が映画会を楽しんだ。

妙義山麓バスツアー（散策山歩き・グルメ部会共催）

この日参加された39名の紳士・淑女は余程日頃の行いが良い人達ばかりに相違ない。当日、10月10日（木）は前日までの雨模様のお天気がウソのように、天高く青々と晴れ上がった。朝8時、東久留米駅東口を出発してバスは一路妙義山に向かう。高崎を過ぎるあたりから榛名富士、男体山、浅間山などが秀麗な姿を車窓に見せ、ハイウェイを下りて妙義山に繋がる道では野猿の出迎えもあって、全員の行楽ムードはいやがうえにも高揚した。最初の目的地、妙義神社の参道の長い石段では、日頃歩き馴れないやんごとなき人達は早くも挫折、先が思いやられたが、妙義山の奇怪な山塊が見下ろす平地、“さくらの里”まで歩いて、前橋より持ち込まれた盛りだくさんの鳥弁当を車座となって食する頃は別人のように元気で、健康な稚気に溢れていた。

秋草に重ね上州弁当解く（橋正治俳句部会長詠）

本ツアーの最終目的地、“妙義もみじ温泉”で汗をおとし、文字通り裸のお付き合いをした後、“みょうぎ物産センター”で名物のコンニャクなど、それぞれ思い思いのお土産を仕入れ、帰途につく。車内は定番のカラオケ大会。ビールのせいか、お歳のせいか、困ったもので、トイレ休憩を余儀なくされ何度も中断、下乗車。その都度積み落とし（？）がないか気を揉んだが、定刻夕7時ぴたり、全員無事東久留米駅前に到着。中には立ち並ぶ居酒屋を羨まし気に眺める人もいたが、皆、お土産を抱えて真っ直ぐにわが家に帰っていった。散策山歩き・グルメ両部会の共催の初の試みは、かくして大成功の一日となった。（比護記）

役員・部会長合同忘年会

12月1日(日)市内本町「磯久」にて24名の出席を得て開催。宴席にラグビー関東大学対抗戦で早大が宿敵明治を完封し全勝優勝したニュースも飛び込み早大スポーツ復活機運に喜んだ。往く年への反省を踏まえ、来る年へ期するものを秘めて、当稲門会、各部会の発展と会員の健康を祈念して21時閉会。

大学・校友会の行事

第24回三多摩稲門会会長会・連合大会

10月19日(土)吉祥寺「東急イン」にて三多摩稲門会会長会、連合大会が開催された。中島校友会長の挨拶の後、退任を直後に控えた第14代総長、奥島総長が演台に立ち8年間の総括を熟弁された。セクトとの戦い、財政の立て直し、早大の今後の在り方など出席者の耳目を集め、就中、「”志立・梓立”早稲田大学の実現」のくだりは多くの感銘を与え万雷の拍手を得た。懇親会では懐かしの”早稲田大学ニューオルリンズジャズクラブ”の現役の面々の演奏を聴きながら杯を酌み交わし親交を深めた。当会より高橋会長、菱山・市川・比護各副会長、松崎幹事が出席。

2002年稲門祭開催

当会より帆角、安次峰、森田各委員が参画し、4月25日第1回実行委員会から10月17日まで計4回の委員会を経て10月20日(日)稲門祭の当日を迎えた。

稲門祭はホームカミングデーと同時開催で西早稲田キャンパス及び大隈庭園で開催され、大隈講堂アトラクションでは有名スポーツ選手によるトークショー、稲門グリークラブによる合唱、さらに車、海外旅行券等が当たる福引抽選会が盛大に行われた。また11月に退任される奥島総長の台詞入り「人生劇場」が印象的だった。大隈庭園内及び構内において各種の模擬店も開かれた。

当会分抽選券では購入40枚中5枚が当たり、酒などが入った「ふるさと賞」等を射止めた。当日構内で他稲門会の委員の人達と一緒に更なる抽選券の販売をした。苦勞したが、この抽選券の売上益から大学への寄付金、奨学金等へ有効に使用されるとの事なので、多少ともお役に立てたと嬉しく思う。

最後の慰勞会にて委員だけの抽選会があり、手持ち番号最後の桁が「8」の人が当選となった。幸運な事に、当会委員3名共当たり結構な賞品をいただいて、抽選券販売の疲れも取れた感じがした。

当日は天候が心配されたが、小雨程度で治まり、大変楽しい稲門祭に参加する事ができた。

(森田 隆記)



第15代総長、白井克彦教授就任

11月5日奥島孝康前総長のあとを受け白井克彦第15代総長が誕生した。それに伴い、11月8日、新任の常任理事(8人)、理事(8人)、監事(2人)が決定、発表された。

だいた朱印は、私の貴重な思い出です。今は四国八十八ヶ所を手掛け始め、仕事で四国に出かけた合間に、コツコツと十数ヶ所まわりました。これ以外にも全国各地の古寺名刹百ヶ所近くでのご朱印をいただいています。

西国三十三ヶ所は、和歌山・紀伊半島先端の那智・青岸渡寺(一番)を振り出しに、日本海側の「天の橋立」に近い成相寺(二十八番)の京都府から大阪、岐阜、滋賀、奈良、西端は兵庫県姫路山中の円教寺(二十七番)まで2府5県にまたがります。

坂東は、鎌倉の一番杉本寺からはじまり、東京・浅草寺(十三番)を中心に、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城の山中から、西は神奈川・小田原の勝福寺(五番)まで1都6県に及びます。茨城山中の日輪寺(二十一番)は、太子温泉に一泊し、小型タクシーに相乗りして麓まで行きましたが最も難所でした。西国の宝蔵寺(三十番)は琵琶湖の竹生島に在り、秀吉の安堵状があることで有名ですが、彦根から船で約1時間、12月～2月は運行休止で行くことが出来ません。

秩父三十四ヶ所は、西武沿線からは便利で、電車・バスは使いましたが、現地ではなるべく歩いて巡りましたので、結構汗をかきました。

札所が設けられた頃、巡拝する人は、殆どが修行僧で、西国三十三ヶ所を150日かけて(当然徒歩)巡拝した僧の記録によれば、かなりの苦行でした。室町中期以降は、一般庶民も札所巡りをするようになり、秩父三十番の宝雲寺には、天文5年(1536年)の百ヶ所巡礼記念の納札が保存されています。

私も江戸時代に奉納された百観音巡礼御札の満願額を見たことがありますが、奉納した人達は極楽浄土行き間違いなしと喜んだことでしょう。しかしこの頃になると、遊楽気分の人も居り、近くに遊郭があったところもあるようです。

約20年前にはじめた札所巡りのきっかけは、関西単身赴任中の休日無聊の慰めでした。仕事の合間とはいえ長期間に亘り仏像に特に縁のない私を札所巡拝に惹付けたものは何なのでしょう。改めて振り返ってみますと次の四点です。

- 一、納経帳に参拝した寺の朱印等をいただくと、未済の寺の空欄が気になり次の日程を考えざるを得なくなる。即ち、昔の人が考え出した「目標管理」にはまってしまう。
- 二、参考書等により古寺の歴史的背景を知る。交通機関・時刻を調べたりするのは少年期の遠足前のように楽しい。現地では荘厳な建物と仏像と周囲の景観に接し、樹木の多い境内でリフレッシュできる。特に西国の寺には境内の保存がよい処が多く、歴史にも登場するので、歴史ものが好きな私は感慨にふけた。
- 三、タクシーに相乗りした行きずりの人と会話したり、途中の景色を眺めたりするのは楽しいことだ。いわゆるちょっとした小旅の楽しみ。偶然で一緒した方から、後日、ご自分の発明品を送っていただき恐縮したことがある。
- 四、目的地まで時間のかかる寺院に到着した時は、満足感と共に日常無縁の信仰心が胸中に湧いてくるような気がするの不思議だ。なにしろ、バスに乗るために1時間以上待ったり、炎天下を汗を流しながら黙々と歩いたのだから。

東久留米雑学塾一第6回・第7回講演要約

10月6日(日)と12月2日(日)の2度にわたり、中央公民館に於いて、産経新聞社社会部記者を経て現在フリージャーナリストとして活躍中の当会顧問、國米家己三(こくまい・かきぞう)氏に同氏のライフワークである「日本人論」を語って頂いた。10月6日(第6回)はそ



の第1話として「イチロー選手とグローバリズム」。米大リーグで大活躍しているイチロー選手という逸材を題材に「日本人とは」を展開、一般市民を含めた50名余の参加者は熱心に聴き入った。12月2日(第7回)その第2話「“草食文化”という視点」。冷たい雨にもかかわらず出席した30数名は草食文化という独自の視点から日本人論を解く講師の話に感銘をうけた。

「わたしの日本人論」

國米 家己三

東久留米稲門会顧問・フリージャーナリスト

第1話 「イチロー選手とグローバリズム」

2002年2月、訪日したブッシュ米国大統領が、国会演説のなかで4人の日本人を挙げた。新渡戸稲造、福沢諭吉、そして小泉首相とイチロー選手である。ふたりの維新の明達の士とともに、イチローは「どんな球でも打ち返せるプレーヤー」として称賛された。

実際、彼のメジャーリーグ・デビューは、その軽量、非力な体にもかかわらず、鮮烈だった。柔軟な打撃、俊足、さらに強肩。「Crack of the bats is the heart of the game (バシッという打撃音こそ、野球の命)」という、ホームラン至上主義のパワー世界に衝撃を与え、その異能ぶりを発揮して01年シーズンのMVP、新人王、盗塁王、ゴールドグラブ、シルバースラッガーの各賞を総なめにし、全米のファンを沸せたのである。

イチローの口ぐせは、「自分であることが一番」「自分にこだわる」である。あくまでもおのれの特性、持ち味に拠るプレーに徹しようとしている。追いつがる取材陣に対しても「自分のペースが崩れるから」「ぼくがこわいのは、僕が変わること」といって寄せ付けない。果し合いを控えたサムライが、いっさい余人の近寄るのを拒む風情と同じである。

彼は、若い世代に属しながら、正統的というか、あるいは古いというか、きわめて日本的なキャラクターをもっている。寡黙で、こつこつ仕事をする。真摯で謙虚、喜怒哀楽をみせず、清潔感もある。他のプレーヤーと数字を競うというより、「自分の内面の問題として、ベストを尽くす」ことに心を砕く。

「イチローって、ずいぶん格好つけるじゃないか」という人も出てくるが、そう、イチローは格好をつけているのである。

彼は、美意識と職人性をミックスしたプレーヤーである。そこにイチローの真骨頂がある、といってもいい。「プロだから、とにかく数字だ、打率だ」という姿勢のプレーヤーがあまたあるなかで、イチローは禅宗の修行僧のように、ひたすら自分と闘っている。一打入魂、潔癖なプレー、きれいなプレーのために自分を磨いている。

同時多発テロが発生しても、グローバリズムが今後も進展することは間違いない。そこで一部に、グローバリズムによって世界が同質化する、またしななければならない、民族特性など考慮の対象にはならない、といった主張が出てくる。しかし、これは暴論である。逆に、グローバリズムによって、それぞれの国や民族の個性、資質が、いま以上に問われる時代になるのである。日本人は、美意識と職人性が一体となって、世界でもきわめて卓越した個性を持つ民族であるが、反面、目の前の局面局面に120%適応しようとするあまり、基本や大局を見失うという大きな欠陥も持っている。イチローが自分の持ち味に徹底してこだわっているように、われわれ日本人も民族的な長短双方を厳しく直視して、強いところを伸ばし弱いところを改め、激動の21世紀を生き抜かねばならない、と思う。

第2話 「“草食文化”という視点」

「日本人は草ばかり食べている」1549年布教のため来日した聖フランシスコ・ザビエルは、ヨーロッパの教会本部にこう書き送っている。ザビエルだけではない。16世紀にやってきた多くの宣教師たちは、同じような内容の書簡を彼らの教会に寄せている。「日本人の食物は他国民とまったく異なり……」と書いた神父もいた。最初の「日本異質論」である。肉食のヨーロッパからきた彼らが、植物系の食材（草食）だけで満足している日本人に驚く一方、彼ら自身、肉に飢えて苦しんだ。最初の「文明の衝突」といえるだろう。幕末、黒船を率いて浦賀沖にやってきたペリー提督も、幕府の饗応には至極不満だった。厚い肉の塊りにありつけなかったからである。

文明開化とともに、ようやくわが国の肉食禁止は解禁となった。7世紀に勅令をもって禁止となってから、実に1200年ぶりの解禁である。しかし、草食の伝統はいまに生きている。現在、日本人はやたらに肉食をするようになったといわれながら、国民1人当たり牛肉の消費量は欧米諸国に比べると、はるかに少ない。

この国の草食の歴史は、縄文時代まで遡ることができる。縄文時代から、この列島は草食列島だったのである。世界でも最も遅くまで、したがって世界では最も長い、実に1万年余りも続いた新石器時代の縄文期。その時代の草食文化が、のちの日本の文化の基層になったとみて差し支えないだろう。縄文が終わり、弥生時代が始まって渡来人が牧畜技術をもってきても、この国には組織的な牧畜文化は根付かなかった。そのまま6世紀、仏教伝来の殺生を忌む文化へと繋がっていったのだ。このようにみると、縄文から現代まで1万3000年の日本歴史を棒のように貫くもの、それは草食文化だったといえることができる。

草食文化のこの国の人々は、草木に鋭い感度をもっている。縄文人は木の実や山菜野草で生き、その後も米、麦その他の植物系食材中心で過ごしてきたから当然である。自然の移り変わり、気象の変化にも鋭敏だった。同時に自然を畏敬し、自然の恵みに感謝し、森羅万象に神宿るとした。だから、自然を管理するのをよしとするキリスト教文化を敬遠した。ここでは自然は自然のままにという“生（き）なり文化”が発達したのである。できるだけ大人が干渉しない教育、自然に溶け込む住居、木肌のでた建具、去勢しない家畜、刺し身……etc 夏、湿度の高い風土は清潔志向の強い文化を育んだ。穢れを忌む、わが国独特の宗教、神道もこの文化が創り出した。清潔志向は、山紫水明の自然のなかで次第に特異な美意識となって人々の心の奥に宿った。さらに、草食文化の草創期から切っても切れない土器、土偶づくりが営々と繰り返され、職人氣質の芽が育ち、それが進化していった。美意識と職人性の融合は、現在日本人の個性を一層際立たせるものになっている。

その他、チームワークのよさ、非攻撃性、リスク管理の甘さなど、日本人の特性は際限がないほど列挙することができる。多くは草食文化という視点、視座から説明が可能だと思う。

ユーラシアが肉食大陸であるのに対して、それと異質な草食文化を伝統としてこの国は生きてきた。現代の政治、経済、社会の諸問題に底流するものも、また草食文化である。その視点が、混迷する現代を解き明かす的確な処方箋を与えてくれる、と思われる。

東稲広報室



新規部会－「近郊・史蹟ウォークの会」（仮称）が発足

12月1日開催の役員会で掲題部会の設立が討議され承認された。部会長にウォーキング活動に豊かな経験をもたれる土屋久郎氏（33年理工）が就任。奇数月第1日曜日開催予定。



創立125周年記念事業募金

平成14年5月7日、13年度別途積立金累計 200,142円に当期利息8円を加算した 200,150円を、同10月22日、14年度の会員募金額 304,000円をそれぞれ大学に寄付致しました。これで大学への累計寄付金額は 1,044,150円となりました。会員の皆様にご協力感謝申し上げます。(募金実行委員一同)

会員の声

<ラグビー観戦記>

川俣 栄一

昨年11月23日、私達4名(桑田、比護、河村、川俣)は、関東大学ラグビー対抗の早慶戦を秩父宮ラグビー場で観戦する機会を得た。当日、霜月の空を覆う鉛色の雲は雨を降らすでもなく、時折吹き抜ける風は肌寒さを感じさせていた。13時半を少々回った頃か、私達は会場のバックスタンドにほど近い席に位置した。



全勝対決となった早慶戦は、ほぼ14時に慶大のキックオフで開始された。前半早大は何度も深く攻め込まれたが、激しいタックルと的確なディフェンスでゴールラインは割らせない。試合が進むに連れ慶大の攻めには迷いが見られミスを重ねた。相手のミスをついた早大は、続けて3トライを挙げ、着実に点差を広げた。

後半、出足が鈍り集中力に欠けた相手に早大は、9トライを奪う猛攻で慶大を74 vs 5の大差で下し、2年連続15度目の優勝に大きく前進した。早大は12月1日の早明戦を残すが、これに勝てば勿論優勝、負けても早・明・慶は1敗で並ぶが、トライ数の差で慶大の優勝は消えた。早慶戦の通算成績は早大の55勝19敗5分けとか。

気を良くした私達は、ノーサイド間際に許した慶大の1トライは謙信の塩に似た武士の情けなどと囁きながら、銀座で祝杯を傾けた。楽しいラグビー観戦であった。

<私のレシピ>

榎本幸子

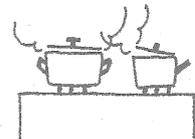
料理メモ①：(むかごのご飯)むかごのご飯は茶会席用に使われますが、わが家では、秋から冬にかけての楽しみの一つとなっています。

材料：米3合、むかご100～200グラム、醤油大匙3、酒大匙3、だし少々

作り方：研じた米に調味料とダシを入れから水加減をします。次ぎにむかごを入れて1時間位してから炊きます。盛り付け後、紅生姜を千切り、のりをのせます。

料理メモ②：(とろろ汁)とろろ汁はどこの家でもつくる料理ですが、これは2～3分で出来上がりますので、一品何かという時にどうぞ。

先ず適当な大きさの長芋の皮をむきます。これをボールかすり鉢に入れてすりこぎで叩きます。少し細かくなりましたら器に盛って出来上がりです。上にのりとか鰹節やわさびなどをのせてお醤油で味付けします。



【編集後記】〇年を経るに従って、同級会など旧友との会合の機会が増えた。別れ際「来年も又元気で、」などと言って再会を約束。「逢うてまた別れの友や時計台」、榎本顧問が大隈講堂時計台の下で詠まれた句だ。そしてその新しい年がきた。今年もまた様々な出会いがあり、色々な出来事に遭遇することだろう。皆様にとり、2003年が実り多い良い年となれんことを編集子一同心よりお祈り申し上げます。

〇本紙第9号は新春特別号として10頁建てとしました。本年もよろしくご支援ご協力下さるようお願い致します。